

## 人文・社会系



## 日本人が「他を信頼しない傾向」について実証的に説明

北海道大学大学院文学研究科教授 山岸 俊男

## 【研究の背景】

私は、「心」の働きが「社会形成」にどのように関わっているかを解明するため、社会科学に心理学的な実験を取り入れた研究を行っています。

日本人は欧米諸国の人々だけではなく、中国や台湾の人々と比べても、他者一般を信頼する傾向が低いことが、これまでの質問紙調査などで繰り返し明らかにされてきました。こういった調査の結果は本当にあてにできるのでしょうか。この疑問に答えるため、信頼と行動の関わりを検証するための実験(信頼ゲーム)を行いました。

この実験では、パソコンを介した匿名の状況でA、Bの2人にそれぞれ役割を設定します。A役の人には、お金を与え、①「そのお金をBさんに預けて増やしてもらうか」、それとも②「そのまま自分の手元に残しておくか」を選択してもらいます。B役の人には、何倍かに増えたお金について、①「その半分を預けたAさんに戻すか」、それとも②「全部自分で取ってしまうか」を選択してもらうというものです。

## 【研究の成果】

自身の利益を最大に確保する「合理的」な行動としては、「Aの場合は預けない。Bの場合は戻さない。」という選択肢になりますが、実際の実験では、そうなりません。その多くは、A役の人はBさんを信頼して預け、信頼されたB役の人はそれに応え、戻す行動を選択します。これは、現実社会における他者との共存、信頼の必要性を表していると言えます。

この実験を日本人、中国人、台湾人の間で行いました。その結果は、これまでの質問紙調査の結果と一貫しており、日本人が見知らぬ相手に示す信頼は、中国人や台湾人が示す信頼を有意に下回っていました。また、お金を預けられた場合に利己的な行

動をとる参加者の比率も、日本人が有意に高いという結果が得られました。さらに、同じ国の参加者を相手にした場合と、別の国の参加者を相手にした場合を比較したところ、同じ国の相手を別の国の相手よりも信頼し、また信頼されたときに公平にお金を戻す傾向、つまり自集団を優遇する傾向は、日本人よりも中国人により強く見られました。

この実験結果は、日本人が見知らぬ他者を信頼せず、他者との関係でリスクを避けようとする傾向が強いことを示しています。こうした傾向は、グローバル化の進展の中で、日本に不利に働く可能性が大きいと考えられます。

## 【今後の展望】

今後は、この傾向が、如何なる制度のもとで強化され、あるいは緩和されるのかを明らかにする研究を進めたいと考えています。

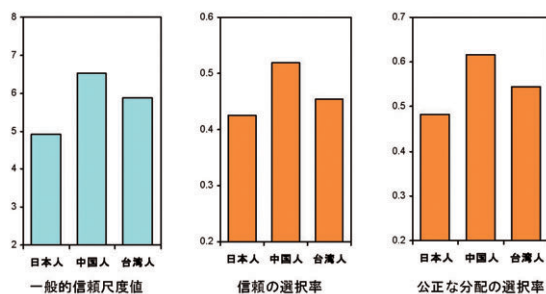


図 日本と中国と台湾からの実験参加者の一般的信頼尺度値(質問紙により測定)の平均、実験での信頼(お金を預ける)の選択率、および相手から信頼された(お金を預けられた)場合の公正な分配(半分を相手に戻す)の選択率。

## 【交付した科研費】

平成14年～17年度 基盤研究(A)「信頼社会形成のための心理・社会的基盤の研究」